

## 第2回若手科学者サミット報告

木下 武也\*1・江口 菜穂\*2

### 1. はじめに

若手科学者サミットは、日本学術会議に置かれた若手アカデミー（若手科学者ネットワーク分科会）が主催する、各研究分野における若手の会組織及び研究者個人間の学術交流を目的とした会（<http://www.scj.go.jp/ja/scj/wakate/>）であり、2016年に初めて開催された（竹村 2016）。第2回の2017年は、6月2日に日本学術会議講堂にて開催され、若手科学者ネットワーク分科会の窓口である日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会の代表として木下が初参加した。第1部は若手研究者による研究報告、第2部はポスターによる若手の会の活動報告、第3部は「若手研究者と研究費」というテーマでパネルディスカッションを行った。参加者はおおよそ50名であった（第1図）。プログラムは<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf2/243-s-0602.pdf>に掲載されている。

### 2. 第1部：若手研究者による研究報告

ここでは、日本教育行政学会若手ネットワーク、日本溶射学会若手の会、水産学若手の会、日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会、Japan-YWP (Young Water Professionals) から推薦された若手研究者による口頭発表が行われた。はじめの教育行政学については、学校の統廃合と行政の関わりについての問題提起を、他の発表については、それぞれの分野における問題・課題を若手研究者たちが説明し、その解決方法についてわかりやすく発表していた。印象的

だったのは、都市環境の水循環に関する発表で、ノロウィルスが冬季において下水処理を行っても除去されず残っていることを示唆する結果が得られたことである。また木下も地球温暖化に伴う成層圏の寒冷化、それに伴い北半球でもオゾンホールのようなオゾン減少イベントが最近起きていることを説明し、大気循環の構造を詳細に理解する必要があることを発表した。

### 3. 第2部：ポスターセッション

ここでは、講堂の外で各分野の若手会に関するポスター発表が16件行われた。日本気象学会人材育成・男女共同参画委員会および気象気候若手研究者交流会の活動を木下が説明する中で聞かれた質問の多くは、女性研究者の割合やつながり方に関するもので、他の若手の会でも女性研究者獲得の仕方やその後のキャリアを意識しているように感じた。また博士課程から若手研究者が集まる会を設けようとしている他分野の参加者には気象気候若手研究者交流会の活動内容が参考になったようである。議論の中で筆者の印象に残った話題は、各分野で開催されている夏の学校が学部生から修士課程向けのものとなっていること、研究手法やテーマが細分化する中で、若手研究者同士のつながりが重要であるといったものだった。

### 4. 第3部：パネルディスカッション

最後の部では、若手研究者数名、文部科学省職員数名をパネリストとして、科研費やローカルルールについて議論が行われた。ローカルルールとは各機関での科研費の使用法にばらつきがあることで、例えば、外部から招待された研究者までローカルルールが適用され新幹線の特急券の提出を求められたこと等が挙げられた。これは担当事務の方々が会計検査を恐れていることが原因であり、これを改善するためには研究者

\*1 (連絡責任著者) Takenari KINOSHITA, 海洋研究開発機構, [t-kinoshita@jamstec.go.jp](mailto:t-kinoshita@jamstec.go.jp)

\*2 Nawo EGUCHI, 九州大学応用力学研究所, [nawo@riam.kyushu-u.ac.jp](mailto:nawo@riam.kyushu-u.ac.jp)

© 2017 日本気象学会



第1図 第2回若手サミット会場（左）と若手研究者による研究報告（右）。

の科研費に対する意見をまとめる必要がある。その窓口は日本学術振興会のwebページ上にあるとのこと ([https://www.jsps.go.jp/j-iken\\_youbou/index01.html](https://www.jsps.go.jp/j-iken_youbou/index01.html))。科研費については、運営費交付金と絡め様々な角度から議論が行われた。科研費＋運営費交付金の総額は大きく変化していないが、科研費の割合が増えることにより資金のある研究者に論文数が集中し、もらえていない人との差が広がる、また大学間の差が広がっていること、大型資金による大型ラボ形成が若手の独立を阻んでいるなどが議論にあがった。

## 5. さいごに

今回初めて若手科学者サミットに参加し、様々な分野の若手研究者、そして文部科学省の若手職員とつながることができ、よい刺激を受けた。このサミットは毎年開催が予定されているため、若手研究者・職員とのつながりに興味のある人は、ぜひ次回以降？積極的に参加していただければ幸いである。

## 参考文献

竹村仁美, 2016: 第1回若手科学者サミットの開催。学術の動向, 21, 9\_73-9\_74.